

夢十夜

夏目漱石

第三夜

こんな夢を見た。

六つになる子供を負つてゐる。たしかに自分の子である。ただ不思議な事にはいつの間にか眼が潰れて、青坊主に
なつてゐる。自分が御前の眼はいつ潰れたのかいと聞くと、なに昔からさと答えた。声は子供の声に相違ないが、言
葉つきはまるで大人である。しかも対等だ。

左右は青田である。路は細い。鷺の影が時々闇に差す。

「田圃へかかったね」と背中云った。

「どうして解る」と顔を後ろへ振り向けるようにして聞いたら、

「だつて鷺が鳴くじゃないか」と答えた。

すると鷺がはたして二声ほど鳴いた。

自分は我子ながら少し怖くなった。こんなものを背負つていては、この先どうなるか分らない。どこか打遣やる
所はなかるうかと向うを見ると闇の中に大きな森が見えた。あすこならばと考え出す途端に、背中で、

「ふふん」と云う声がした。

「何を笑うんだ」

子供は返事をしなかつた。ただ

「御父さん、重いかい」と聞いた。

「重かあない」と答えると